

まちづくりの思想 (2)

「まち」とは何か？

京都大学大学院教授 藤井聡

「まちづくり」を考えるにあたって、何よりも大切なのは、「まち」とは何なのか、という認識である。もしこの認識が、「まちづくり」に関わる人々の間で乖離していれば、皆でまとまり一致団結して、「まちづくり」を進めていくことなど不能となるだろう。だからこそ、まちづくりに取り組む人々は皆、「まち」とは何なのかの認識を大きな乖離が無きように共有しておくことが必要だ。

そもそも広辞苑によれば、「まち」とは「商店の立ち並んだ繁華な土地。市街。」と定義されている。すなわち、「まち」というのは、単なる工場だけの土地やマンション街だけの土地を意味するのではなく、商業を中心とした何らかの都市活動が展開されている土地の事を意味するのである。

恐らくは、この点については皆多かれ少なかれ同意するところなのではないかと思う。

しかし、問題は、ここから先の「まち、というものをどう解釈するか」という点である。

この問いについては、長い間、社会学の中で論争されてきた「社会とは何か？」という議論を参照することが有益であろうと思う。

そもそも社会学では、その黎明期においては「社会」というものを「生き物」と捉える「社会有機体論」が主流であった。これは、ハーバート・スペンサーが近代の社会学を立ち上げた時、その学術体系を「生物学」に準拠して構築したという背景に大いに影響を受けている。この社会を生き物と捉えるこの考え方では、生物には病気や健康・不健康、そして「死」があるように、それぞれの社会や国、そして「まち」もまた「病気」にかかったり、「健康」になったり「不健康」になったり、そして最悪の場合には「死」んでしまうこともあり得ると考える。

しかし、この考え方は、近代の社会学の中では、ほとんど「死んだもの」の様に扱われ、カビの生えた古くさい、時代遅れの理論ということにされる傾向が強く、社会を一つの生き物として捉えることをある種のタブーと見なしている節すら伺えるところである。そして生き物として捉える変わりに、社会というものをある種の「機械」と見なす傾きが強くなっている。そうした潮流の背景には、物理学の成功に触発され、数学を駆使しながら進化した近代経済学の影響力の増大ある。例えば近年我が国の様々な経済政策、都市政策、国土政策に巨大な影響を与え続けている新自由主義経済理論や構造改革の考え方は、まさにこの「機械論」に基づく典型的な理論体系だ。

いずれにしても、「まち」を有機的な「生き物」と見るのか、それとも無機的な「機械」と見るのか——これによって、まちづくりのかたちは根本的に異なったものとなる。

もしまちが「機械」なら、「よいまち」にしていくために必要なのは、「修理」であったり、「部品の入れ替え」であったり、「機械の改造」である。例えば、兎に角新しいビルを建てたり交通システムを作ったりすれば、それだけで後は何をしなくても、よい街ができあがる、という話となる。あるいは、IT機器を模して言うなら、よりよい「ソフトウェア」を導入していくことも重要となろう。これは例えば、新しい法律の仕組みを導入したり、新しい税制を導入したりということに対応するだろう。

ところが、もしもまちが「生き物」であるなら、それだけでは「よいまち」が作られるようなことは断じてない。例えば、右腕をよりいいものにしようとする時に必要なのは、右腕を切り落として新しい右腕を持ってきて接続することではない。ロボットならいざ知らず、生身の人間の場合には、そんなことは不可能だ。

その代わりに、我々が右腕をよりよいものにしようとするなら、健康を保ちながらしっかりと栄養のある食事を取り、右腕を鍛え上げる訓練をする、ということが不可欠だ。そうした取り組みがあってはじめて、右腕をよりよいものに「育てていく」ことが可能となる。

さて、我々が暮らす「まち」は、機械なのか生き物なのか――。

この答えを解く鍵は、社会を機械と見なす取り組みで、本当にその「まち」が改善するかどうかを考えればよい。

例えば、「機械論」の考え方でシャッター街化した街を蘇らせることはできるだろうか？

もしも、街が機械であるなら、どんな街でも、部品を入れ替え、ソフトウェアをすげ替え、さながら「新品」の様にしてしまえば、100%蘇らせることができる。

しかし、「まち」はそうは行かない。どれだけ素晴らしい鉄道を造り、道路を造り、素晴らしいまちづくり条例を作ったとしても、それでまちが活性化するとは限らない。なぜなら、「まち」というものは、決して「モノ」や「システム」を意味するものではなく、そういった目に見える物理的なモノやシステムに、人々の「賑わい」や「生業」や「ふれあい」等の、命ある人々の活動がなければ、「まち」ではないからだ。これは、例えば、動物は肉体だけがどれだけしっかりしたものがあっても、その動物に「命」が無ければ、それは既に生き物でないということと同じだ。

無論、まちづくりをするにあたって、モノやシステムの改善が不要であるということなどあり得ない。それは当然ながら、時と場合によって極めて重要な役割を担う。しかし、まちにとってモノやシステムそれ自体が重要なのではなく、そのまちの賑わいや人々の生業をより生き活きとしたものにするための「手段」として、それらが必要とされるという限りにおいて必要とされるのであり、その逆では決してないのだ。

この様に考えれば、我々がまちづくりを行うにあたって採用すべきは、「機械論」ではなく、社会有機体説であることが明々白々となる。そもそも機械論を採用する限り、まちづくりの成功が約束されることがない一方で、社会有機体説を採用しつつ、そのまちの「生命の力」つまり「ヴァイタリティー」を想定し、それを活性化せんと務めた上で始めて、

まちづくりを志す人々が皆志向する「まちの賑わい」に幾ばくかなりとも近づきうる可能性が得られるからだ。

だからこそ、「まちづくり」を志す人々は、「機械論」を思想的な背景とする主流派の経済理論などに基づく安易な処方箋（例えば、安易な特区制度や規制緩和など）には、徹底的な懐疑の目を持つことを忘れてはならない。言うまでもなく、そういう処方箋が「まちの生命の力」を活性化しうると判断しうる場合においてはそれらを活用することはやぶさかではないとしても、その場合においてすら、それらの処方箋の危険性を十二分に留意しておくことが必要であろう。なぜなら、それらの処方箋はそもそも、その「まち」の活力を向上させることを企図したものではないからである。

では、「社会有機体論」に基づくまちづくりとは一体如何なるものなのか——この点については、また次回以降、論じたいと思う。